

## 「見るだけ」から「ものいう存在」への道

～HPH加盟から国際カンファレンス発表まで～

大泉生協病院 院長 齋藤文洋

まずはじめに、皆様からのカンパや励ましに支えられ、2013年のHPH国際カンファレンスに東京保健生協から4演題を提出し、無事発表を終えることが出来、さらには地域住民で生協組合員の一人、菊池善次郎さんが優秀賞を獲得できたことに感謝いたします。

これはひとえに、組合員の皆様、東京健生病院、大泉生協病院をはじめ、老健施設、各診療所、訪問看護やヘルパーステーションなどなどのすべての職員、そして東京保健生協の歴史を支えてきた先輩方の60年にわたる毎日のたゆまぬ努力の賜物であると思います。

さて、私たちは2011年年末に東京健生病院が、そして翌年1月に大泉生協病院がHPHに加盟しました。そして2012年5月には台湾で行われた第20回HPH国際カンファレンスに視察団を派遣。HPHとは何か、国際カンファレンスとは何かを学び、今年2013年、ついに自ら国際カンファレンスに参加するに至りました。

そもそもHPHの概念は、根岸理事長(東京保健生協国際カンファレンス代表団団長)の文章でもわかるように、私達医療生協あるいは民医連に所属するものにとっては「当たり前」の物でした。ですから、HPHについてみなさんとお話すると、当たり前すぎて、「何故、今更HPHなのか?」という質問を多く受けました。同じようなことが2012年の民医連が主催したHPHセミナーでも言われていました。HPHはすべての人にWell-being(完全なる幸福・健康とでも訳しましょう)を、と訴えます。そして医療機関のRe-orientation(保健医療機関のサービスの見直し、あるいは再組織化)により、地域住民、職員そして受診したり入院したりしているすべての患者さまの健康度を増加させ、そのために実践をしようと訴えます。

しかし、私達の組織は「再組織化」の必然性が少ない組織だったのです。「このまま行ける」。これが今HPHである理由でした。ただ、HPHとそのネットワークでは、もう一つ重要なことがありました。「実践を共有しよう」ということです。私達には決定的にこれが欠けていました。生協や民医連の内部には意識が向いていましたが、外部に向かっての情報発信の意識に乏しかったのです。

私達が2012年の台湾の国際カンファレンスで学んだことの多くが「ものを言う」ことの重要性でした。その意味で昨年今年の国際カンファレンスにおける台湾の位置は非常に刺激的なものがありました。彼らは自らの実践を語り続けて、そして発展しているのです。

そして私たちも、この60年にわたる実践を「語る」べきである、「もの言う」べきであると考えたのです。2012年9月に行われた全日本民医連主催のHPHセミナーでは国際HPH事務局長(CEO)のハンヌ・ターネセン教授が奇しくも「何故、あなた方の経験を私たちと共有しないのか、秘密にしないで下さい」と言うメッセージを残していかれました。

こうした経緯の中で、国際カンファレンスで何とか私たちの実践を示したい、という思いが募っていきました。

やがて東京保健生協の中に法人 HPH 推進委員会が創設され、東京健生病院と大泉生協病院にそれぞれ推進体制が作られました。大泉生協病院では組合員さんとともに大きな波を起こすことをめざして、練馬協議会との協力体制をとり「練馬HPH推進部」を立ち上げました。そして早い時期から、地域での実践を形にして示そう、組合員さんの活動をまとめよう、と検討をはじめたのです。

更に職員への実践も形にしようということになりました。そこで表舞台に現れたのが「ヘルスチャレンジ」です。生協らしい実践であり、地域も職員も同じ土俵で話ができる。このとりくみにすぐに手をあげたのは、保健師の中野ひろえさんと、理学療法士の秋野ひかるさんでした。二人とも「健康で幸福に生きる」とは何なのかを、常日頃から考えざるを得ない立場で仕事をしている方たちです。中野さんはとくに、健診などを通して職員の健康を、秋野さんはベリーナイス体操をリハビリテーション科で作りに行って行く中で、職員も地域もすべての人々の健康を考えていました。

「ヘルスチャレンジを題材に実践をまとめよう」と声をかけると、たちまちの内にアイデアを出してきたのです。個人的な意見ではなく、それぞれ健診課リハビリテーション科としての内容でした。それは HPH 活動が集団的に始動した瞬間でした。

一方、「地域の組合員さんの活動をまとめる」という課題は、暗礁に乗り上げていました。何しろいきなり国際舞台で、「英語で学術的な話をしろ」と言うのですから、面喰らうのも当然です。『柿の木ハウス』や『ちびっこシアター』、WHO 高齢者にやさしいまちづくりアンケートのまとめ、継続してきた 3.11 以後の放射線定点測定、NO<sub>2</sub> の数十年に渡るデータのまとめ、ベリーナイス体操実践のまとめ、そしてヘルスチャレンジなどなど。組合員さんの実践は、枚挙にいとまがありません。にもかかわらず、実際にそれをまとめあげて国際カンファレンスに持って行こうという人物はなかなか現れませんでした。

一方で、国際カンファレンスの日時と、演題締切日が発表されます。何と締め切りが 2013 年 1 月 5 日。時間は無情にも過ぎてゆきます。9 月、10 月、11 月…。組織部の藤井強史さん、大泉の HPH 推進部事務局長、松本浩明事務次長の二人が影になり日向になり走り回りました。ついに土支田・大泉支部が、100 人以上が参加したヘルスチャレンジの詳細なアンケートをとったデータをまとめている、という話が入ってきました。しかも、元々題材にと考えていたヘルスチャレンジによるまとめです。

もう時間もありません。ヘルスチャレンジも終わり、今から何か新しいことをやるのは無理です。どうしても組合員さん、地域住民が関わる活動を世界にアピールしたい。練馬 HPH 推進部の思いを実現するにはこれしかない！そこで思い切って支部長の菊池さんをお願いしてみることにしました。ところが、なかなか「ウン」と言ってくれません。

「他にもある、もっと全体でまとめて生協組合員みんなのものとして出すべきだ」と。これは困った。今年メインテーマに据えたいのだが、推進部の面々は焦ります。推進部メンバーには組合員さんもいます。メンバーの大寺さん、山名さんに、「こういう時はどうしたらいい？」とアドバイスをもらいながら先の二人が奔走。今回ばかりは事務局の強い意向に押されて、遂に菊池さん陥落！支部委員の方々も説得してくれました。

大泉生協病院院長の私を含めて発表者4人、データも揃い、やることは決まりました。さあ、あとは「抄録」を書いてインターネットで HPH 国際カンファレンスの投稿フォームに登録するだけ！

でも「だけって」言っても英語でしょ？そう、そこが問題です。誰がどうやって英語にするの？

そこで菊池さんの抄録は私が、私のものは勿論私が、秋野さんは自分で、中野さんは強力な助っ人が現れ手伝ってくれることに。この強力な助っ人とは篠塚雅也先生。以前大泉生協病院の常勤で内視鏡に糖尿病治療に、なんでも出来てしかも博学な医師。今はみさと健和病院(日本で HPH に4番目に登録)の健診を担当し、みさと健和病院の HPH 推進ディレクターをやっている人材です。今年の HPH 国際カンファレンスでも発表されていて、今も大泉生協病院の外来と当直を手伝っていただいています。

12月はそれぞれにデータをまとめ、英文抄録に没頭。でも、難しい！12月半ばを過ぎても出来上がりません。焦る面々。大丈夫かな。ああ、もうクリスマスです。そして納会。まもなく、正月休み。まだ出来ない…。みんな正月返上です。今時は便利なもので電子メールやインターネット上で翻訳サイト、英文チェックサイトもあり、これらを駆使して連絡を取り合い、締め切り当日、秋野さん、中野さんから登録できましたと連絡。私も何とか間に合いました。しかし菊池さんの日本語抄録がまだ手に届きません。やはり難しいか。ところが天が味方してくれました。抄録締め切りが、3月まで延長されたのです(内心、正月を返せ〜)。その後、無事菊池さんの抄録もエントリー。

3月22日遂に演題採択結果の発表。ウィーンの WHO コラボレーションセンターから私、秋野さん、菊池さんと次々に採択しました(Accepted)と言うメールが届きます。4人みんな採用だねと言っていたが、中野さんだけ Accepted のメールが来ません。1日たち2日たち、…。来ません。落ちたのか。でも国際カンファレンスのホームページに発表された採択演題の一覧をしらみつぶしに見ると、中野さんの演題、ありました！抄録登録の時、どうもメールアドレスを間違えていたようです。こうして4人全員が演題採択。日本全体で11演題採択されましたがその内4つが東京保健生協からという快挙でした。ここから全日本民医連などから注目を集め始めます。4つという数もそうですが、組合員さん、地域住民の演題が採択されたのが注目の的です。

発表は5月23日と24日と決まりました。残り2か月。この短期間でデータをまとめ、形にして、それを英語にしてポスターにする。気が遠くなりそうです。まずは早速、国際カンファレンスの参加登録。インターネットで登録ですが勿論英語です。これなんて書いてあるの？これで良いのかな。試行錯誤しながら4人とも無事参加登録完了。次は宿の手配に飛行機の手配。法人 HPH 推進委員会事務局長の武市東京健生病院事務長と松本さんのコラボレーションにより、安く手配完了。全日本民医連からもツアーの案内が来ていましたが、ちょっとお高いのでこちらはパス。

そしてポスター作成です。でもどんな風に作ればいいのかさっぱり分かりません。そんな時、根岸理事長より、「先輩の千鳥橋病院がホームページで過去に発表したポスターを見せてるよ」とアドバイス。早速それを見てみると、日本の地図や病院のロゴをあしらひ、文字のバックには富士山や桜が散りばめられたそれはそれは見事なポスター。どうやって作ったらいいのだろう。試行錯誤の結果、パワーポイントを使うと何とかそれに近いものができることが判明。病院内のメンバーはしばしば集まりデータを吟味、先の篠塚先生にもアドバイスを受けながら徐々に形ができていきます。菊池さんの報告は藤井さんと松

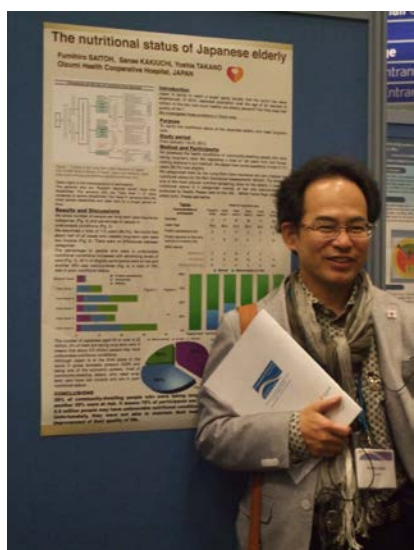
本さんがお手伝い。すべて自分たちで英語にするのは難しいので、私のついででプロの翻訳家にも依頼。彼女の名は大月啓子さん。実は鉄砲洲診療所の患者さんで私の義妹。何度も何度も校正をいれて、生協や組合員活動が伝わるように見事に翻訳してくれました。何しろ、普通に使わない言葉が多い上に「生協用語」もたくさんあり、かつ医学用語や心理用語まで出てくるのですから、翻訳者泣かせです。こうしてできた原稿を、中野さんがプリントセンターで美しく印刷。出来上がったのは出発前ギリギリの5月15日。

できあがったポスターを抱えて、5月21日いよいよスウェーデンに向けて出発です。オランダ、アムステルダムで乗り換えてイエーテボリへ。朝10時に成田を出発して約10時間のフライトでスウェーデン時間で夕方5時過ぎランドベッター国際空港に到着。ここからバス30分ほどで、宿のクラリオンホテルポストに。ここは元々郵便局だったので「ポスト」という名がついたとのこと。もう夜の7時ごろなのに、日が傾いた気配なし。白夜の国を実感した瞬間です。



この日はみんなで、ホテルで夕飯。美味しいと言う海産物、特に小エビの料理にワインで乾杯。翌日は市内をそれぞれに観光してスウェーデンを見て回りました。

夕方6時いよいよ国際カンファレンスのオープニング。基調講演を聞き(もちろん英語で)、夜は民医連主催でターネセン教授と教授の右腕チョール氏との懇親会。私はたまたま教授の正面の席になったので、一生懸命、英語でお話。私は国際学会なので、欧米の慣例に習って妻の千恵子(東京健生病院元職員、総合診療医、3歳までアメリカ在住)を同伴したので彼女も英語でお話し。彼女は何故か流暢に英語で…。この懇親会で菊池さんは再び脚光を浴びます。ターネセン教授も地域住民の参加に素晴らしいを連呼。そしてスウェーデン語で乾杯という意味の「スクォール」と言いあって盛り上がりました。ちなみにスクォールとは、頭蓋骨のこと。英語ではSkull。バイキングの時代、頭に兜のように被っていたのが動物の頭蓋骨で(よく絵にあるやつですね)、これを脱いで酒を注ぎ飲んだのだそうです。だからスクォールが乾杯の意味になったとか。



一夜開けて、5月23日は私と秋野さんの発表の日です。朝、4人のポスターを受付して準備完了。国際カンファレンス事務局でポスターを貼ってくれるので、後は予定の時間にそこに行けば良いだけです。それまでは、篠塚先生や全日本民医連の伊藤先生の口演を聞いたり、基調講演を聞いたり。基調講演は大講堂で行われるのですが、その合間合間に、カンファレンスのテーマ「体と心」に沿って子供達の弦楽器の演奏が入ったりパフォーマンスが入ったり。

そして午後3時。いよいよ本番。それぞれにポスターの前に立って、通りかかる人からの質問に答えて行きます。時間は30分。私はハンドアウト(手渡し用資料)を渡しながら、数人に簡単な話をして終了。秋野さんのポスターには、ターネセン教授が来訪！さぞかし緊張したことでしょう。何はともあれ東京保健生協の発表第一弾は無事に終了しました。

この日の夜は、Gala Diner(ガラ・ディナー)。HPHカンファレンスで行われる公式晩餐会です。私も妻と共に参加しました。民医連はまとまって一つのテーブルでワイワイガヤガヤ。あまりの人数の多さに会場はすし詰め状態でした。その中で次々にディナーが運ばれてきます。山盛りの殻付き小エビにチーズの山、そしてワイン。更に肉やら何やら。ステージの上ではABBAの二世？とも思えるような女性2人組が美声を響かせ、最後にはABBAのダンシングクイーンで会場総立ちとなり、国籍を問わずに前列の大きな列の輪を作って会場を一周。根岸理事長も先頭を切って踊っていました！

そしてディナーも終わり夜の11時半、世も更けたと会場を出てビックリ。まだ明るい！白夜に近いスウェーデンの夜の街をみんなで歩いてホテルに戻りました。

翌日、私と妻は家庭の事情で、菊池さんと中野さんの発表を見ることが出来ずに泣く泣くイエーテボリを去ることとなりました。後は根岸理事長がやってくれます。再び長い旅について、アムステルダムから成田へ。5月25日昼頃、やっと家に着き、イエーテボリのことを妻と語っていると、フェイスブック経由で新しい情報が飛び込んできました。菊池さんがHPH事務局から表彰され、「ブルーリボン」を貰ったと言うニュースです。バンザイ！こんなことが起こるとは夢にも思っていなかったので望外の喜びです。

組合員さんの活動こそが東京保健生協の真髄なのですから、どうしても組合員さんに発表して欲しい、それが法人HPH推進委員会の望みでした。「生協の地域の組合員さんのとりくみはきっと注目される」という自負もありました。それが現実のものとなったのです。

それにしてもはじめての代表団派遣でのこの快挙はビギナーズラックかも知れませんが、やはり私たち東京保健生協の組合員さんと職員のたゆまぬ努力の賜物です。

そしてカンパやバザーや美味しい食事やお菓子やらを作って応援してくれた全職員、組合員の皆さんに、心からお礼を申し上げます。

一方で菊池さんの受賞は、私達に大きな義務を課しました。それは「これで終わりにはできない」ということです。世界が、WHOが、生協の地域の健康を守るとりくみを認めたのです。そして受賞は「その活動を全世界と共有せよ」というメッセージだと思います。

来年も、再来年も、その次の年も、未来永劫、私達は地域と共に歩み、健康と幸福(Well-being)を追求し、その活動を世界の人々と共有して更に発展させてゆかなければなりません。来年のカンファレンスは4月23~24日スペインのバルセロナで行われます。次は、これを読んでいるあなたの番です。あなたの実践は、全て自分も含めた周囲の人たち皆のためのヘルスプロモーションです。さあ前を向いて、菊池さんに続きましょう！

以上